ホテル文化による地域形成

～　日本の西洋文化に果たした役割　～

The local culture formation by a Hotel culture
～ A duty of the westernization　～

中鉢　令兒*1
CHUBACHI, Reiji

江戸から明治以降の移行期における近代化で、ホテルの果たした役割は大きい。特に大都市ばかりでなく地方都市における近代化では、国際リゾート地の発展とともに近代化が進んだ。本稿では、箱根、日光、軽井沢に焦点を当て地域づくりとホテルの果たした役割について整理した。箱根と日光では、地域振興の担い手として、軽井沢では、リゾートとホテル文化の形成に対する支援者としての役割について考察を加えた。

キーワード：富士屋ホテル、金谷ホテル、星野温泉の試み

1.　はじめに

江戸幕府から明治政府への政権移譲は、日本における社会構造のグレート・リセット[1]の予兆であった。このグレート・リセット予兆は、開国であり欧米文化の合理的価値観の誕生である。この予兆は、東京、横浜、神戸、などの幕末の開港した地域の居留置から始まった。居留地には、欧米の生活様式を支える様々な施設と文化が求められた。特に居留地のホテルは、集約された形で欧米の生活文化が実践されていた。こうしたホテル文化は、居留地からの旅を許可した内地旅行規則（1974）、翌年には、「外国人旅行免状」が設定され、京都、奈良などの都市と箱根、日光、軽井沢、雲仙、蒲郡など明治初頭の避暑地利用が可能になり、併せて欧米文化も地方へ伝播していった。こうした欧米人の利用するホテルは、欧米化のスタイルを支える文化を地域に浸透させる役割を果たした。また、箱根、日光では、山口仙之介、金谷善一郎、金谷兄弟が単にホテル文化普及に留まらず、日光壬寅歳暴風の風水害復興の折（1902）の街づくり[2]、箱根のアクセスの整備などで地域開発の中心人物として寄与した。他方軽井沢は、A.C.ショーのキリスト教精神が地域の文化形成に大きく寄与し、ディクソン夫妻と亀谷旅館（万平ホテル）が軽井沢の生活文化を育成した。さらにこうした土壌の中で、30 年を経て星野温泉（星野リゾート）の製材所を会場とした山本鼎を中心とした自由画教育運動と新渡戸稲造を校長とする軽井沢通俗夏季学校が、リベラルな地域文化を育成した。即ち、地域のホテルが、単に本陣屋、旅籠から業種転換してホテルになり、欧米人といった新しい市場を対象として経営を続けたのではなく、地域の文化のパラダイムまでも変革させるといった、重要な役割を果たした。本研究では、地域づくりを含めると広範囲になるので、こうした領域は割愛し、パラダイム変更期のホテル文化を考察し、日本独自のホテル文化を考察することを目的とする。

*1 北海商科大学

2.　ホテル創生期のサービス

旅籠からホテルに業態変化したとき、宿泊施設の在り方の変化が生じた。J.C.ヘボンの勧めで金谷善一郎がカッテージインを開業した当時の業務の様子は、イザベラ・バードによって詳しく紹介されている。その記述によれば、「部屋が気に入ってもらえるかどうかをひどく心配している(中略)美しい自宅を洋風にするのは避けています」と今日の上品な旅館の風情を持っていたことが偲ばれます。また対応した女性について、venerable(徳),sweetest(思いやりのある), most graceful(優雅さ、気品)[3]を持ち併せた人と称えている。その文面から見れば、サービスではなく今日のホスピタリティに近い内容と推測される。当時の日光のホテルは、外国に対し様々の問題を内包していた。例えば、ホテル側は、宿泊費などの通訳をガイドに頼り、ガイドによる賄賂を上乗せした料金の伝達など不正の温床[4]となっていた。J.M.ガーデナーは、1890 年前後日光に夏の避暑ために訪れていた。ガーデナーは、外国人を止めていた金谷ホテルの善一郎に、こうした問題の改善のために息子真一に立教学校（セントポールズ学校）の入学を勧めた[5]。ここで英語を修得した金谷真一は、卒業後金谷ホテルを継ぎホテル文化の形成に寄与した。図 1 は、1920 年代のホテル案内で、当時のホテル運営の概要が把握できる。食事は 2 回提供され和洋料理の選択が可能であった。またチップに当たる茶代は、受け取りを辞退しており箱根富士屋ホテルとともに、会計の不明瞭化をもたらすチップ制度は、採っていなかった。この茶代に関する資料は、W. ウエストンの日記にかなり克明に記されているが、1894 年の記載では、弁当代とほぼ同じで 10 銭が

"NIKKO—SUNSHINE"

"Do not say magnificent until you have seen Nikko"

NIKKO, one of the beauty spots of the Orient, should be included in the itinerary of every visitor to Japan. On a hill known as *Hotokeiwa* ("Buddha Rock"). above the swift Daiya River, is the mausoleum of *Ieyasu* (E-yay-yasu), the founder of the Tokugawa shogunate, one of the most illustrious men of Japan; and close by is the mausoleum of *Iemitsu* (E-yay-mi-tsu), his grandson, almost as renowned. Their mausolea and associated buildings, regarded by world travelers as the most superb religious structures east of Agra, are the most gorgeous buildings in Japan, and have made Nikko internationally famous.

There are many other interesting places to visit with *Nikko* established as headquarters. The garage operated by the hotel will supply motors cars for drives and information in regard to places for fishing, hunting, mountain climbing and other pastimes. Any time of the year is ideal for a visit to *Nikko*. THE FOUR SEASONS in *Nikko* make it a year-round resort.

Spring: Plum blossoms—April. Yashu azaleas (large pink blossoms), Cherry and wisteria—May. Azaleas (small blossoms)—June. April 17th—Annual Festival of the Futa-ara Shrine.

Summer: Boating and fishing in the lakes. Late bush azaleas and Iris—July. June 1st—2nd: Annual Grand Festival of Tosho-gu Shrine. On both days the spectacular medieval shrine procession is held. Once seen it is never forgotten.

Autumn: Maple leaves and other tinted foliage—October to November. October 17th—Annual Autumn Festival of Tosho-gu with its celebrated spectacular procession.

Winter: Skating at the Nikko-Kanaya Hotel Rink-mid-December to March. Skates are available for hire.

FUJIYA HOTEL MIYANOSHITA JAPAN INFORMATION OFFICE NATURAL HOT SPRINGS

NIKKO-KANAYA HOTEL

The Only European Hotel in Nikko

TELEPHONE NIKKO 1 OR 7. CABLE ADDRESS: "KANAYA, NIKKO"

5 Minutes Motor Ride From Station
10 Minutes Walk to the Nikko Temples
World Wide Reputation for the Excellence of its Service and Cuisine
Rooms, Single or En Suite, With or Without Bath.
Rate, Yen 12.00 up per day, American Plan.
Hotel Porter, speaking English, meets every train.
Hotel Garage, operating over 50 Wellequipped cars—always at your service.

日光 金谷ホテル御案内

一、當館は日光唯一の洋式旅館でございます

一、御宿泊料　御一泊三食付
御一人室　金拾 貳 圓以上
御二人室　金貳拾參圓以上

一、御食事
御朝食　金 貳 圓・御晝食　金參圓
御夕食　金參圓半錢・御紅茶　金五拾錢

一、御料理　西洋料理の外に御望みにより日本料理も調理致します

一、御茶代　は御辭退申上げます

一、ホテルの設備　洋室 八十室
ブールスケート場・玉突場
圖書室・温室・物産陳列場
酒場・舞踊場・ラヂオ

一、日光の四季
春はつゝじ　夏は避暑
秋は紅葉　冬は氷すべり

図 1　金谷ホテル　1920 年代の案内所　（筆者蔵）

多くみられる。1912 年の日記では、また小田原などでの不満も多く記されているが、詳細の記録も無く、1910 年代には、江戸の旅籠時代が終焉し近代旅館やホテルの意識が観光地で一般的になった点が推測される。富士屋ホテルには、1937 年 5 月秘書を伴ったヘレンケラーが投宿した。そこでホテルで飼われていた尾長鶏を非常に気に入ったが、その後その尾長鶏は死亡した。その為再び訪れるかもしれない、ヘレンのためにロビーの柱に尾長鶏を彫刻（図 2）した。また温室を敷地作り、ホテル内の生花を自前で栽培（図 3）した。こうしたサービスの在り方は、山口正造の経営意識は、現代のホテルホスピタリティに通じるところが多くあった。

図 2　ロビーの尾長鶏の木彫

図 3　ホテルの花を育てる敷地内の温室

3.　地域のリーダーシップとしてのホテル

洋食の要は、主食のパンである。現在でも金谷ホテル、富士屋ホテルの入り口にはベーカリー部が営業をしている。また軽井沢では、ディクソン夫妻の指導により万平ホテルのベカリー部が発足し、後ベーカリー部のチーフが独立し、現在も旧軽銀座にフランス・ベーカリーは営業をしている。イギリス宣教師で登山家のウォルター・ウェストンが 1912 年穂高下山後に松本で 2 度目に滞在をした松本市本町 1 丁目の古田宅治の経営する丸中屋（丸中千歳館）[6]は、16 年後旅館業を廃業して 1928 年丸中パン屋として創業を始め現在も老舗パン屋として創業をしている。ウエストと同行していた写真家 H. J. ハミルトンは、その滞在先でパンの製法[7]を広めていた。彼にとっては、登山といった重労働に食事のパンは不可欠で、必要に迫られて地方の主な拠点都市で、パン技術を伝承した。様々な地域に東洋趣味を彷彿させる観光資源が存在し、多くの欧米人が異文化に興味を持ち地方を探索したことから、地方に洋風食文化が伝播した。また、東京の蒸し暑さを逃れて、日光、軽井沢、箱根に避暑地が設けられ、多くが別荘ではなくホテルにて滞在したことから、このホテルを中心に欧米文化が地方に根付いた。当時の食事の提供されていた具体的内容の事例は、明治 40 年（1907）3 月のメニューにあるカレーが再現されて、現在の金谷ホテル売店部で売られている。そのメニュー表によれば、スープ、魚料理、鶏肉コロッケ、牛肉の蒸し焼き、ライ

スカレーとデザートとなっている。これらの洋食は、当時の料理長渡部朝太郎よって作られていた。また、箱根富士屋ホテルの日替わりコースメニューには、洋食の内容とともに、裏面に日本文化の様々な側面が紹介されていた。食事の合間の話題の提供とともに日本をよく知ってもらいたいとの配慮と思われる。図４は、1910 年代に提供されたメニューで東海道五十三次がその風情とともに解説された。此の執筆者は青山学院酒井温理教授で、当時のホテルのオーナー山口正造の質問に答える[8]形で日本を紹介している。富士屋ホテルは、We Japanese として、1934 年に最初の１巻目が発刊され、1950 年までに９版出版された。第２巻は、1937 年に発刊され 1950 年までに６版出版された。最後の３巻は、1949 年に発刊されその翌年２版が出版された。2005 年、D. Garis がそれらをまとめて We Japanese[9]として新たに発刊した。

第１巻では、 ナショナル（国旗、国歌、大正時代、火山）、 歴史と伝説、 日本の、芸術的な美しさと詩的味、 日本の特徴、迷信、税関、フェスティバル、宗教的なドラマ・ダンス、スポーツ･ゲーム、フラワーズ、 年の名前、 美術磁器、製品、産業、 雑貨（三浦按司神社、アイヌ、紋章、芸者、金魚、温泉、日本の花嫁、日本のことわざ、国際口ひげクラブ ）などが紹介されている。第２巻では、ナショナル（祝日、日本人の長寿、ミネラルスパ）、歴史（城、敬虔な縄、鳥居）、日本の特徴、芸術との発明、税関と実践、神社仏閣、伝統と伝説、画像や彫像、ドラマ、ダンスとゲーム、自然史である。第三巻では、トピック別に分類されない 100 種類以上の１ページでの議論、「日本の様々な名前（かるた、福寿草、節分等）」、「お伽噺（かちかち山、一寸法師、因幡の白ウサギ、牛と善光寺等）」が紹介されている。また出来るだけ本物を見て理解してもらうことを意図して、敷地内に創られている。例えば、「江戸時代の水の役割」[10]（第３巻）として水

THE OLD TOKAIDO ROAD

Guests arriving from Odawara traverse a part of the old Tokaido ("East Sea Road"), between Odawara and the suspension bridge across the Hayakawa ("Rapid River"), below Yumoto. Guests who come or go by motor or bus between Yokohama-Miyanoshita (45 miles) journey for the greater part of the way over this road—which runs through regions famous in the history of Japan.

One of the Fifty-three Stages.

Along the Tokaido in feudal days passed gorgeous processions of the *daimyo*, or local lords, on their way to and from *Yedo* (Tokyo) and Kyoto. It was the main highway in the Eastern parts of Japan, and before the advent of railways it was crowded with a constant stream of traffic. Under an edict of the Shogun, *daimyo* and their wives were compelled to reside in Yedo for stipulated periods. This was done so that under the watchful eye of the Shogun there would be less tendency among powerful clans to rebel against the Shogunate government. Furthermore, the tremendous cost of these *daimyo* trains with their hundreds of retainers prevented the accumulation of funds necessary to equip and move armed forces. There were 53 post-stations where the *daimyo* stayed overnight. These have been immortalized in *Hiroshige's* color-print series: *The Fifty-three Stations of the Tokaido.*

The road is noted for its bordering pines which in places meet overhead, forming sylvan tunnels. In places age, the needs of an expanding populace, and the widening of the road for modern traffic have thinned out these trees, but there still remain enough of them for travelers to realize how beautiful the road must have been in feudal days and what interesting sights must have been presented by the vast number of people, mostly foot-travelers, along its entire route.

An interesting trip is to proceed by motor car or bus from the Fujiya Hotel to Lake Hakone, and there connect with the Tokaido bus line, rejoining the Miyanoshita road at the suspension bridge, which occupies the site of the old feudal bridge, thence journeying back to the hotel by bus, or on to Odawara, if desired. In many places along this route may still be seen the large stones which paved this winding road through the Hakone District. From it the views of mountains, sea and shore line are worthwhile.

MENU

Mariné de brème de mer en salade bio
小田原早川港直送　石鯛のマリネ
有機野菜のサラダ添え

Consommé ou Potage du jour
コンソメ　又は　本日のポタージュ

Chou chinois enveloppé de saint-pierre sauce beurre blanc
相模湾産的鯛のキャベツ包み
ブールブランソース

Entrecôte de bœuf poêlé
au parfum de "Wasabi" légumes de saisons
サーロインステーキ　季節野菜を添えて
山葵ソース

Saint -Honoré de fraises et son sorbet
苺のサン・トレノとシャーベット

Café ou Thé
コーヒー　又は　紅茶

Fujiya Hotel　　Miyanoshita Hakone

図４　富士屋ホテル 1910 年代の日本文化紹介付きレストランメニュー（筆者蔵）

車小屋の解説がされたが、今日もその水車小屋は敷地内に残されている。第 3 巻は、GHQ に接収された時以降の内容が主であるが、卑屈にならず日本文化を堂々と表現しているところに、大正昭和を通じてホテルマンとしてのポリシーを守り続けた意志が見られる。また彼の孫に当たる山口由美の「消えた宿泊名簿」によれば、横浜ニューグランドホテルはマッカーサの日本上陸直後に泊まったホテルだが、「オーナーの野村洋三は昼食後 315 号室に呼ばれ、意見を求められた。彼は、日本の食料事情を説明しホテルで用意できないことを訴え、合わせて市民に豊富なアメリカの食料を放出して欲しいと訴えた。その後横浜市長に大量の放出物資が届けられた」[11]らしい。まさにホテルマンが、ビジネス一辺倒でなく、地域で生きるホテルの在り方を物語る内容である。

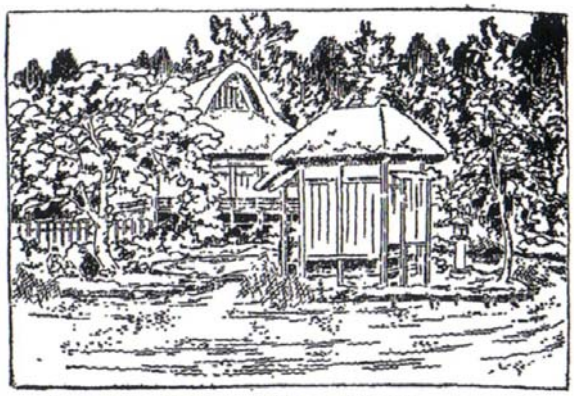

図 5　敷地内にある水車小屋とレストランメニューに紹介された水の活用（水車小屋）[12]

4.　地域づくりの担い手

金谷真一と山口正造（旧姓金谷正造）はともに地域の利便性を図るために公共交通を普及させた。その先鞭は、1913 年ホイットニー米軍少佐（マニラ駐在）が富士屋ホテルに滞在し帰路につくとき、依頼した自動車が現れなかった。ホイットニーは、「一流ホテルがなぜ他者の自動車を当てにするのか」と詰問した。2 代目山口正造は、それを機にファイアットの 7 人乗りの幌型自動車など 3 台購入し 1914 年富士屋自動車として創業（図 6）した。さらに 1919 年乗合バスとして富士屋自動車として運営を始めた。彼にとっては地域の発展こそ富士屋ホテルが持続的発展するとの考えがあったと推測されよう。こうした考えは、1 代目山口仙之介の塔ノ沢と宮ノ下までの道路工事の推進と鉄道馬車の推進とその後の電化への寄与は、その下地にあったと思われる。こうした考えの背景には、福住正兄（萬翠楼）とそこで逗留した福沢諭吉の地域開発の主張が存在していた。福沢は、1873 年 3 月 16 日の足柄新聞に『箱根不振の相談』といった一文を載せ、湯本ー塔ノ沢の道路の改修を提言している。そして道路の重要性を福住は実感し、兄として慕っていた山口仙之介も道路の重要性を認知した。さらに福沢は、「箱根山まで‥雄大な計画を立てよ」と力説[13]していた。また日光の金谷真一は、1908 年頃足尾銅山の役員が金谷ホテルに来て、日光に電車を走らせることを提案した。当時金谷ホテルには、商売敵も存在し金谷善一郎は裏方に徹した。1910 年日光に電車が走り国鉄日光駅と岩の鼻までを結びその後 1913 年に馬返しまで伸び

た。その頃から中禅寺湖まで観光地が広域化し金谷真一が中心となり日光自動車株式会社を創業（図 7）した。しかし、1930 年東武鉄道が日光浅草を結び日光自動車株式会社を東武鉄道に売却し東武バスが誕生した[14]。こうした一連の展開は、観光地としての基本的条件を整え今日に至る観光地日光を形成した。中でも金谷兄弟が日光と箱根でお互いに参考し合って国際的リゾート地を形成した点は、ホテルといった宿泊施設が地域の進歩と新たな在り方を目指すといった役割を認識するのに十分であろう。

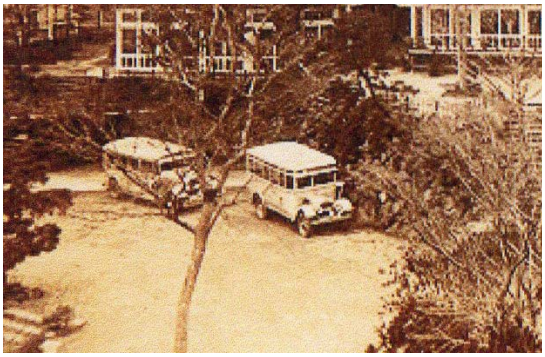

図 6　絵葉書:富士屋自動車のバス(筆者蔵)

図 7　日光自動車と日光電気軌道の線路（神橋周辺）（筆者蔵）

5.　星野リゾートの源流

星野リゾートは、星野温泉を基盤としていることは周知のことである。2 代目星野嘉助（国次）は、生糸で得た利益を温泉の開発に使い 1913 年星野温泉を創業した。昭和初期に至る星野温泉で特筆すべき点としては、星野遊学館と中西悟堂による日本野鳥会の支援である。前者は、1921 年芸術教育夏季講習会で山本鼎を中心とする自由画教育運動と北原白秋、有島武郎など人道主義と理想主義を標榜する白樺派が中心として展開された。この会場は 2 代目星野嘉助の製材所の木材室で、その後内村鑑三が星野遊学館と命名した。この遺構は現在軽井沢高原教会に引き継がれ、その資料は石の教会内村鑑三記念堂の資料室に収められている。この星野遊学館での活動は、上田神川村での農民芸術研究所の講習会とともに日本の自由画教育の基礎を創った。また、この自由画教育を支える物として、日本独自の画材としてクレヨンとパステルの利点を兼ね備えたクレ

図 8　内村鑑三記念館に保存されている命名の書

図 9　絵葉書：軽井沢通俗夏季大学（筆者蔵）

パスを佐武林蔵と山本鼎の共同開発として誕生した。こうした活動の土壌は、1918 年に新渡戸稲造校長とする軽井沢通俗夏季大学の開校が存在する。此の大学の開校の理念の背景には、後藤新平のグローバルな視点で学問の普及の重要性を後主張する姿勢と支援が不可欠であった。当時の軽井沢には、現在まで続く理想的別荘地の文化的要素の萌芽が始まっていた。後者の中西悟堂は、野鳥の会（1934）の創設し、富士山麓で野鳥に親しむ探鳥会を初めて開いた。また足しげく星野温泉に滞在し、3 代目嘉助（嘉政）に星野エリアと隣接する国有林は、世界的にも多種類が生息する野鳥の宝庫であると指摘した。その後中西悟堂と星野嘉助は生態系の保護を目指し、「国設軽井沢野鳥の森」の指定を得た。それらの意志を受け継ぎ星野佳路は、1992 年この豊かな軽井沢の森を有効活用しようと、「野鳥研究室」を設立し、1995 年に野鳥研究室を軽井沢野鳥の森のエコツーリズムを実践する「ピッキオ」に改称した。このピッキオは、周囲の小学生の学習の一環としてツキノワグマの生態調査や宿泊客のモモンガの観察アトラクションや野鳥観察のアトラクションを提供している。また現在軽井沢星の屋は、宿泊部分を除き地域住民や観光客に開放しており新しいリゾートホテルの在り方を示している。

図 10　国設　軽井沢野鳥の森の入口にある中西悟堂の像

図 11　星野温泉敷地内ピッキオの事務所

6.　まとめ

1867 年江戸時代は終焉に至り、武家諸法度に定められていた参勤交代によって成立していた多くの宿泊施設がその必要性が薄れた。他方鎖国が廃止され、多くの欧米人が来日し、新しい利用者として誕生した。特に東京の蒸し暑さを嫌った欧米人は、避暑地と言われる場所で夏を過ごし旅籠や本陣を基盤として、明治以降のホテルの原型が形成された。しかしその文化は単にホテルに限られてはいず、地域に欧米の食文化、自動車社会など欧米化をもたらした。また金谷ホテル、富士屋ホテルは、交通の利便性の改善など地域振興の担い手としても活躍した。また、軽井沢の星野温泉は、星野遊学館を提供し自由画教育を推進する核として機能した。他方星野温泉エリアの豊かな自然を野鳥の森として保護に努め、自然学習の文化を育成する機能も持ち、今日エコツーリズムの担い手として機能している。こうした日本の一流ホテルの特徴として、地域文化を継承し、新たな創ることに努め地域振興に寄与している点が明確となった。一方 P.コトラーらは、ホテルの経営の視点として市場のターゲット化とマケーテングのセグメント化を示唆[15]している。

欧米のホテルの経営の方向性は、市場戦略の先鋭化を連想できる。他方日本では、星野リゾートを代表とする地域連携をより強める存在を選択していると指摘されよう。本稿ではトッピクス的にホテル文化を整理したが、日本には独自のホテル文化がありそれを踏まえ発展することが、企業の持続的発展につながると指摘されよう。

参考文献・注

○　文中の写真は、2008～2013 年のデザインサベー時に筆者によって撮影したものである。

1) R. フロリダ,（邦訳：仙名紀）（2010）、the Great Reset, HarperCollins publishers,
2) 中鉢令兒（2012）、災害と観光地の復興、日本都市学会年報、Vol.45,PP.192-200
3) Isabella Bird(1911),Unbeaten Tracks in Japan, Japan & Stuff Press P.63
4) W. ウエストン（邦訳青木枝朗）（1997）日本アルプスの登山と探検、岩波文庫 474　P.128
5) W. ウエストン（邦訳青木枝朗）（1997）日本アルプスの登山と探検、岩波文庫 474　P.358
6) W. ウエストン（邦訳三井嘉雄）（1995）日本アルプス登攀日記、平凡社東洋文庫 586　P.129
7) W. ウエストン（邦訳青木枝朗）（1997）日本アルプスの登山と探検、岩波文庫 474　P.250
8) 山口由美（2007）箱根富士屋ホテル物語、千早書房、P.148
9) S.Yamaguchi, ed.: F.D.Garis, A.Sakai, (2002).We Japanese, Routledge.
10) S.Yamaguchi, ed.: F.D.Garis, A.Sakai , (2002).We Japanese, Routledge, PP.468-469
11) 山口由美（2009）消えた宿泊名簿、新潮社、P.P.144-145
12) S.Yamaguchi, ed.: F.D.Garis, A.Sakai , (2002).We Japanese, Routledge, PP.468-469
13) 松沢成文（2007）、破天荒力、講談社、PP.80-81　を根拠にした。
14) 常盤新平（1998）、森と湖の館、潮出版、PP.125-128
15) P. Kotoler (2003). Marketing for hospitality and tourism. Prentice Hall ,PP.730-737

（ 2014年1月21日受理 ）